

子どもの可能性

美濃市教育委員会 教育委員 長瀬 秀子

今年の春、主人の誕生日に娘が、
「これからは、ドローンを使った農業も必要。体を大切にしてくれね。」
と、カメラ付きのドローンをプレゼントしてくれました。

退職後、夫婦で家の周りにある畑でいろいろな作物作りに挑戦しています。主人の父母は、専業農家であったため、十分な広さの畑と農機具があるのです。作物作りは楽しいのですが、害虫や病気、天候によって出来具合がかなり違います。時には目が届かなくて、気が付いた時は、虫にやられていたり、病気がかなり出てしまったりしていることがあります。娘は、作物の様子を楽に観察できるようにとカメラ付きのドローンをプレゼントしてくれたのでした。

そんな時、家から車で10分くらいのところにドローンの操縦体験ができる施設ができたのを知りました。そこで、ドローンの基本的仕組みや操縦方法を学ぼうと夏休みに小学校の孫を連れて体験してくることにしました。

体験会場には、担当係の方以外に数人のボランティアの方がいて、ドローンの部品の役割やプロペラの向き、組み立て方など丁寧に教えてくれました。4つのプロペラがバランスをとって上下左右回転と自由に飛ぶことができるようにするICの小ささと能力のすごさに改めて感心するばかりでした。

ボランティアの方は中学生でした。その中の一人は中学1年生で、ドローンのレーサーのプロということでした。時速100キロのスピードのドローンを自由に操縦することができるのだそうです。腕前を少し見せてもらいましたが、それは見事なものでした。

孫は、すぐに操縦に慣れ、ドローンを思うように動かし、回転させたり輪をくぐらせたりすることができていきました。私はというと、頭では操縦の仕方は理解しているのですが、ドローンの動きやスピードになかなかついていくことができませんでした。今の技術の進歩のすごさとともに、子どもや若い人の能力のすごさに感心するばかり。

ドローンは、日本製ではなく、海外で作られたものでした。係りの方が、
「日本の技術はずいぶん遅れてしまっている。ドローンに関しては、追いつくことはなかなかできないかもしれない。」

と、残念そうに語ってくれました。

「たしかにドローンは海外製だけど、その中に使われている部品の一つ一つを見ると日本の技術がかなり使われている。実は、日本の技術にはいいものがたくさんある。目を輝かせて挑戦し取り組んでいる子どもたちがきっと日本を明るいものにしてくれる。」

「そうね。だからこそ子どもたちの可能性を伸ばしていく教育や若い人が十分に力を発揮していく場が必要なんだね。」

と、かつて海外を渡り歩いてきた企業戦士だった主人と話しました。

スイッチ

輪之内町教育委員会 教育委員 田中 俊弘

伊勢湾台風の頃は稲作が基幹産業であり、中学校にも水田があった。ぴんと張った道糸に沿って一列に並んで男子学生が田植えをする。“非農家”に生まれて初めての体験で、自分以外はすべて農家の子どもで巧みに植えて行った。指導をされていたS先生が目ざとく察知されて、大垣から転校してきたN君と2人を有効活用しようと思われ、刃物を研ぐように指示された。倉庫に山のように積まれた草刈り鎌を我流で研いだ。次の日も次の日も鎌を研ぎ、鎌の次には、山のように積まれた包丁を研いだ。遂には刈込鋏や押切まで研いだ。カーブした刃でも砥石で研ぐことができるものだ。

このS先生、授業中にやたら怒る、注意を受けると、K君とセットで職員室に呼び出される。どちらかが注意を受けると毎回2人が呼ばれ、こっぴどく叱られることもなく、牛乳瓶一杯ずつのイナゴを取ってくるように命じられ、イナゴは学校で飼ってある鶏のエサとなり、副読本のサンプルなどをもらって帰った。いただいた副読本で読んだ『小諸なる古城のほとり雲白く遊子悲しむ…』の小諸と千曲川の景色へのあこがれは今でも消えることはない。

ある時、校庭の樹木に名札をつけるようにと蒲鉾板と、油性ペンを渡され、毎日せっせと名札を付けた。校長室に鎮座していた学校の歴史よりも古い牧野植物図鑑を使って名前を調べ、旧仮名遣いがわからず国語の先生にたずねた記憶も楽しかった。理科がご専門のクラス担任の先生から何か手伝うことはないかと声をかけていただいた。職員室の先生たちの間で自分が話題になっているらしいことを知った。

自分的にはこのS先生が自己肯定感を育んでいただいた素晴らしい教育者と思い込んでいた。こんな話を主任指導主事の先生に紹介したところ、それは受ける側の感受性が上がっており、そのスイッチに触れてくれたのがS先生であったというわけである。今、この主任指導主事のC先生のスイッチになるチャンスはないものかと秘かに思っている。